

玉 藻

第47号

宮坂 覺先生
御退任記念号

フェリス女学院大学国文学会

二〇一三年(平成二五年) 二月二〇日発行

玉 藻 第四十七号 宮坂 覺先生 御退任記念号

フェリス女学院大学国文学会

二〇一三年

日本語方言における「南北方言分布」 (語彙音韻文法) の特徴

安 部 清 哉

【要旨】日本語の方言分布の特徴的パタンの1つ「南北方言分布境界線」について解説する。同様の言語・方言の境界線は、中国語、朝鮮語、さらには、ヨーロッパのインド・ヨーロッパ語の二大語派である Centum Satem の分布境界線にも認めることができる(安部2013.3)。

本稿では、東アジアの言語史研究として、また、インド・ヨーロッパ語との比較研究においても、重要性の高い南北方言分布境界線の研究の一環として、南北方言境界線をもつ語彙・音韻・文法の諸現象を列挙して概説するものである。

キーワード：南北方言分布境界線、気候境界線、方言分布パターン、方言区画論、

1 はじめに——日本語方言における南北方言分布の概要と言語学的意味

日本語の方言境界線として、東西方言境界線「糸魚川・浜名湖方言境界線」とならんで、もう1つ重要な境界線と考えられるのが、日本列島の方言を南北にわける境界線である(◆図1参照)。

その境界線は、後述していくように、日本列島だけではなく、アジアへも連続している方言境界線である(安部2007.3d、◆図2)。それゆえ、日本語および日本語方言を、アジアの中で相対的に位置付けていく上では、看過できないものである。

また、近時の執筆者の研究からは、その境界線と同様の背景をもつ言語・方言境界線は、ヨーロッパのインド・ヨーロッパ語族の語派(つまり方言) Centum と Satem の境界にも見出せることがわかった(安部2013.3、◆図3)。それゆえ、日本語のみならず、世界言語史レベルの視点から研究していく必要がある問題と考えられる。

ここでは、主に日本語方言を対象とし、現時点で南北方言分布境界線をもつと解釈された方言分布にして取り上げ、その特徴について概略を解説していくことにしたい。なお、「南北対立型方言分布」の語彙・音韻・文法それぞれの個々の方言現象の解釈につ

いては、別稿を予定している。

2 南北に偏在するパタンをもつ方言分布とその名称

南北いずれかに偏在するという特徴的方言分布パターンは、柴田武(1962)の指摘以降、日本の典型的方言分布パタンの1つとして位置づけられてきた。この方言分布の境界線名としては、従来の「東西方言境界線」「糸魚川・浜名湖方言境界線」などと同様に、境界線の名称の1つとして、安部(1999)では、「気候(境界)線」あるいは「南北気候境界線」と呼んできたものである。ここでは当面、日本列島上の位置的關係がわかりやすいように「南北方言分布境界線」(別称:気候線)として使用していくことにしたい。

初め「気候(境界)線」と名付けたのは、気候の境界線が方言の境界線形成に直接または間接に影響するという点を名前をもって示すことで、その特徴的な地理的位置への注意を喚起するためであった。特に、次のような点を考慮してのものであった。

- ①その成因の最も根源にある要因を客観的に示せること、
- ②その境界線は、気候という要因ゆえに、方言だけでなく日本文化全般に及ぶものであり、方言だけに限定されないということが明示できること、
- ③自然が成因であることを示すことで、日本列島外の言語・文化現象全般への共通性の研究へと問題意識の拡大を促しやすいこと、
- ④同様に、その客観的成因を明示することで、該当する現象が研究上禁忌視されやすい民族・人種等の問題ではなく、生活環境への適合と自然環境と密接に関わる共有文化領域の形成にあることへ、研究視点を向けられること、
- ⑤④と裏表の関係であるが、人種・民族・種族等の問題として短絡的に判断されたり、先入観によって考察されたりすることで、科学的研究が遅延することを回避できること、

一方、その名称が十分定着しない現段階で、方言を主な対象に使用すると、方言の南北での相違そのものの要因がすべて直接的に「気候」にあると解釈しているかのように誤解されるむきも見られる。そこで、改めて、「南北方言分布境界線」を使用していくことにしたい。(たとえば、暖かい気候がある種の音を生み出したり、ある文法現象を作ったというように、文法や音韻の相違が、気候そのものによって形成されたと解釈しているかのように誤解されないように。)

そのようなこともあるので、ここでは地理的位置によって「糸魚川・浜名湖境界線」

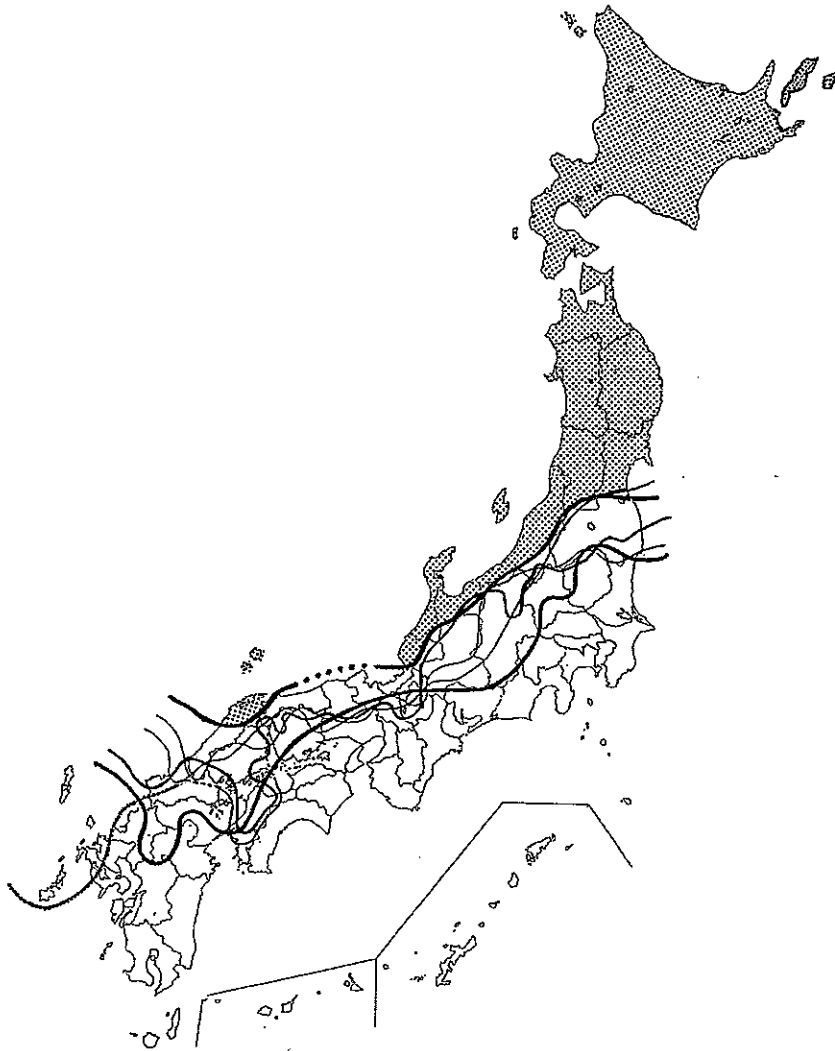


図1 南北方言境界線
(2013補正版=九州の点線は「旋風」の補正線)

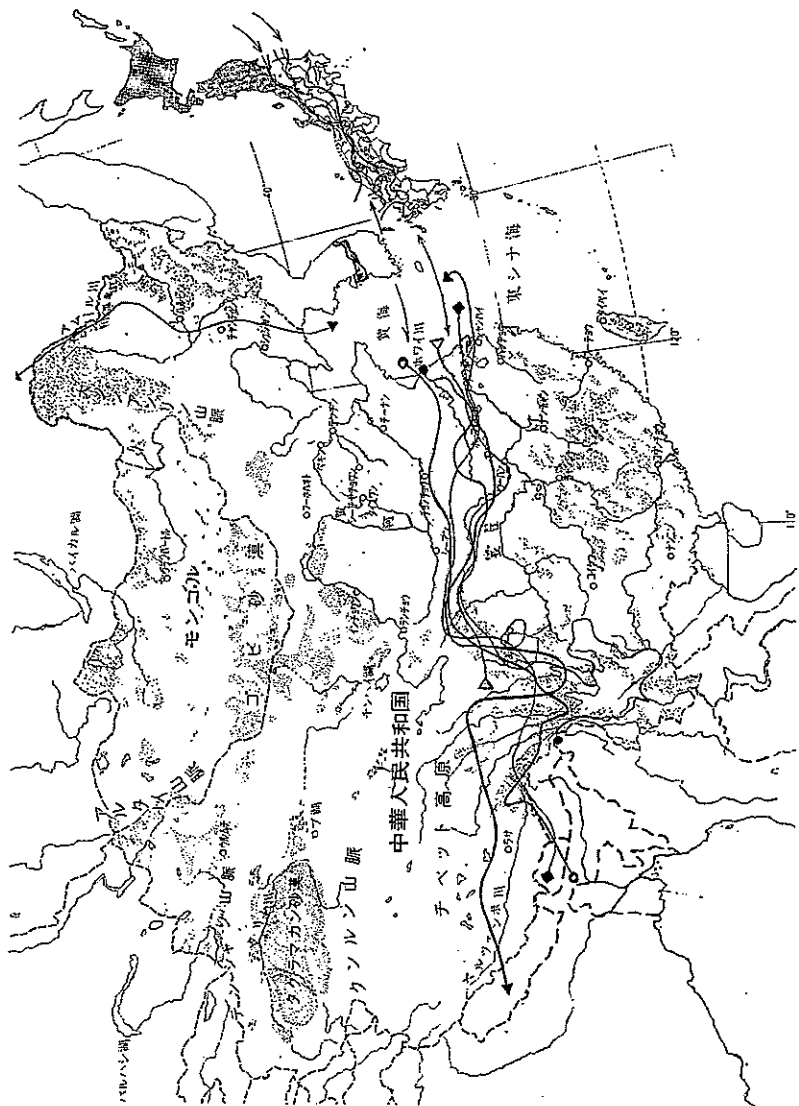


図2 アジアにおける言語・文化・気候の南北境界線

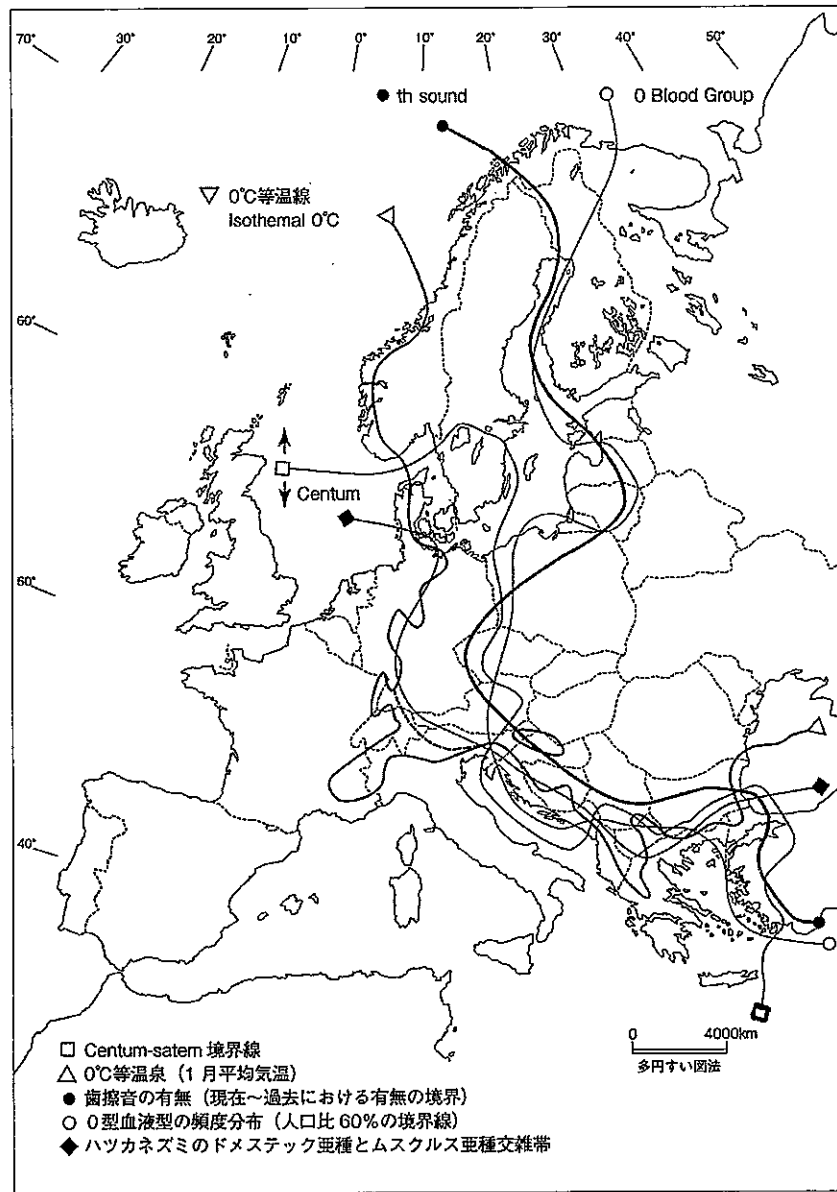


図3 ヨーロッパにおける言語・文化・気候の境界線

2018.8.0の方の図を参照
(一部修正している)

を「東西方言境界線」と呼ぶのと同様に地理的特徴によって示し、「南北方言分布境界線(気候線)」とし、「気候線」は必要に応じて括弧書きで付すことにしたい。

3 南北方言分布境界線の諸現象(2012年10月時点)

ここでは、まず、南北方言分布境界線に該当すると考えられた方言現象を列挙しておく。研究の進展に伴い該当すると考えられる方言分布は増加しており、以下は2012年10月現在のものである。

安部(1999)で「気候線」として提示した、日本語方言境界線におけるこの南北方言分布境界線は、下記の①-④と②の5つであった。このうち、②のネマルについては、その時点では、気候の影響が明確であった他の分布例と同様に扱えるか判断を保留していた。その後の検討から、古代動詞派生語形[-aru型]の残存分布パターン」という現象の1つとして位置付けられた(安部清哉(2008.3))。その類似例として、今回オガル・カクマを追加する。

さて、以下の⑤以降は、その後の考察(安部(2003.3)科学研究費報告書(⑤-⑩)、小林隆氏科学研究費研究会、安部(2006.3)、安部(2008.3)など)によって現在まで追加されたものである。項目毎の最後の研究者氏名・年や文献名は、その分布を最初に指摘したものか分布データ(地図・文献)を掲載する資料である。(①-⑤は定説となっている分布で指摘した研究者名等を挙げる。地名での指摘は鏡味明克氏が最初。他は安部清哉2008参照。)

なお、分布地域の南北を、記号▲▼により、いわゆる裏日本側▲(北方)・表日本側▼(南方)として示す。★各分布図は紙幅の都合で割愛し、別稿にて提示予定である。

□語彙(特に寒冷気候に関わる傾向)

- ①▲シモヤケ(LAJ127図「しもやけ(凍傷)」)(柴田武1963)
- ②▲無回答・タツマキ(LAJ264図「つむじ風」)(真田信治1979)
- ③▲ノリツケホーサー・ノリツケホーソー(LAJ298・299図「鼻の鳴き声」)(佐藤亮一1986)
- ④▲シミル(LAJ97図「(手拭いが)凍る」)(加藤正信1995)
- ⑤▲「シバレル(凍)」(『日本方言大辞典』での使用地域による)
- ⑥▲「フキ(吹雪)」(『日本方言大辞典』での使用地域による)
- ⑦▲「シガ・スガ(氷・氷柱)」(『日本語地図』「氷」「氷柱(つらら)」による)
- ⑧▲風向名「アユの風」(室山敏昭2001他)

- ⑨▲地名「溜池を表す『～堤』」(鏡味明克1984)
- ⑩▲地名「アラマチ(荒町)」「<新町」(鏡味明克1984)
- ⑪▲▼えらび歌の歌詞「神様一天の神様」(石井聖乃2003「えらび歌の地域差に関する調査研究(研究ノート)」『東京女子大学言語文化研究』12)
- ⑫▲感動詞「サーサ・サイ」澤村美幸(2011)『日本語方言形成論の視点』岩波書店

□音声(唇音化、口蓋化、喉頭化に関わる。)

- ⑬▲▼「ボウ(追う)」(LAJ147・189)(唇音 bu-母音 o)(唇音化)(安部2008.3~)
- ⑭▲▼地名分布「bu-ü 対応(Budo 葡萄-udo-uto 宇藤・宇都)」(唇音 bu-母音 u)(唇音化)(安部2008.3)
- ⑮▲▼「キツ-ヒツ(櫃)」の「*kw-p 対応」(唇音化、喉頭化)(安部2009.3)
- ⑯▲▼「『酸っぱい』のスカイ-スツパイ」の「*kw-p 対応」(LAJ41図)(唇音化、喉頭化)(安部2009.3)
- ⑰▲▼「かかと(踵)のアクド対ア(フ)ド」の「*kw-p 対応」(LAJ129図)(唇音化、口頭か)(安部清哉2009.3)
- ⑱▲▼「セ・ゼの発音の口蓋化・喉音化(ヒエ・ヘ)」の分布(口蓋化)(地図は「日本方言音韻総覧」掲載)
- ⑲▲▼「u<i(フガシ(東)・フゲ(麓))」の分布(LAJ11・12)(iの口蓋化)(鏡味明克1984)
- ⑳▲▼「四つ仮名」における「一つ仮名地域/zi/」とそれ以外の地域(iの口蓋化)(地図は「日本方言音韻総覧」掲載)
- ㉑▲▼「アクセントが母音の広狭により変化する地域▲&変化しない地域▼」(唇音性?)(分布図は真田(1989)あり)

□文法(「aru型動詞」の残存)

- ⑳▲「ネマル」の分布(LAJ「座る」「あぐら(胡座)をかく」)(安部1999)
- ㉑▲「オガル(生育)」の分布(<生ふ)(『日本方言大辞典』の地域による、安部)
- ㉒▲地名分布「カクマ」(かくまる(囲))(<囲む)(鏡味完二1958)
- ㉓▼「下二段(語幹開音節)動詞の優勢残存」(平山輝男1984の図、安部2008.3指摘)

4 「南北対立型方言分布」の特徴と位置付け

本章では、現時点で、明らかにされてきているこの南北方言分布境界線の特徴と研究

上の位置付けを、簡略に説明しておく。

[定義]

日本語の方言の分布パターンを主に地理言語学的観点から典型的に把握した場合の分布類型の1パターンである。日本列島の本州から九州にかけてのおよそ中心線から南北に2分した場合、北方(主に日本海側)ないし南方(主に太平洋側)に偏る方言(東北は北方に属する事例が多い)の特徴、あるいは、その分布パターンを指す。

やや古い言い方で言えば、「表日本(型)方言」および「裏日本(型)方言」とで対をなして「南北型分布」を形作っているもので、基本的には◆図1に示した境界線(帯)によって南北に区切られ、南方が「表日本方言」、北方が「裏日本方言」である。この分布類型は柴田武が「霜焼け」の分布で最初に指摘したものである。なお、その地理的範囲と境界は、どの方言現象を優先的に考慮するかによって多少の南北間の幅はある。

[名称]

「表日本方言・裏日本方言」という表現は、太平洋側・日本海側を表す古い表現方法で、しかも評価的な面があるため、現在は、「太平洋側方言—日本海側方言」と呼ばれたり、あるいは、「東西対立*」をなす「東日本方言—西日本方言」に合わせて「南日本方言—北日本方言」(南北対立)などとも呼ぶのが適切であろう。

なお、典型的分布パターンには、1)東西型、2)周圏型(同心円型—内輪・中輪・外輪方言を含む)、3)南北型、4)交互型、5)各地型、6)1地方型、7)錯綜型(ないし併用混在型)、8)全国一律型、(加藤正信1989)等の主要分類による)などがある。そのような「南北」の名称がふさわしからう。

[特徴]

提示してある具体的分布事例から見て、南北型の方言形成には、次のような場合が考えられる(事例参照)。

- ①元から一方の地域のみ言語現象である場合(「鼻の鳴き声」)、
- ②南北共通にあった言語事象が片方では消滅ないし衰退して一方のみ残存した場合
- ③本来南北共通にあった言語事象が片方で独自の形態や意味など別の言語事象を形成した場合(「手拭いが凍る」シミル「ボウ(追う)」)、
- ④本来同じ起源の言語事象が南北での条件に合わせてそれぞれ独自の言語現象を形成した場合(「キツ—ヒツ(櫃)」)、

⑤一方の地域のごく一部の現象だったものが後に拡大し一方のみに均質的に分布した場合(風名「あゆ(の風)」等)、

⑥その他

南北各々における種々の方言現象相互の関連性を示唆する一定の共通性や法則など、「表日本式・裏日本式方言」のように類型化できる規則生は、語彙と一部の音声に指摘できるが、まだ多くはない(後述)。その点では、例えば、「東西型方言」における所謂「子音性優位—母音性優位」、あるいは、「周圏型」の1つとしての「外輪方言対〔中輪+内輪方言〕」における「総合的—分析的弁別的」のように(これらにも諸説ある)、音韻・文法・語彙全体に共通する特徴が指摘できる研究段階までは至っていない。

柴田武(1962)の指摘以後の類型事例の追加と形成要因の学際的な研究によって、従来課題であった東北方言と出雲方言の共通性・類似性の多くは、この「北日本方言」としての歴史的連続性に起因することがほぼ解明され、また、東北北陸出雲という北日本方言のすべてが南日本方言より古いとは必ずしも限定できないこと(前後関係が逆である場合や同時的分化の可能性など)なども明らかになってきている(安部清哉2008参照)。

[形成要因]

この南北境界線は主要な成立要因の1つとして、南北の年間の気候差(気温、降雨降雪等)等の気候区分が直接間接に影響しており、その点からも古い成立であることが推定される(一例として言えば、気候の相違によって動植物や民俗学的習慣の南北分布が異なれば、関連する方言語彙も南北差を生じることになる)。石器・動植物ほか文化人類学的事象においても同じ位置での南北差が確認されている。アジアの南北での音声上の相違が形成された要因と時期については、安部(2012.3)の考察がある。

さらに、同様の気候の相違は大陸側と朝鮮半島、ヨーロッパ大陸にもある。特に、中国語と朝鮮語には、同様の緯度的位置での南北方言分布境界線が指摘されている(安部2008)。中国語と朝鮮語の2言語の方言との比較方言学的研究や、インド・ヨーロッパ語との比較研究(安部(2013))も今度の課題である。

[研究史]

柴田武のほか、真田信治、佐藤亮一、加藤正信、鏡味明克、大橋勝男、安部清哉等の研究がある。なお、後掲の音韻の事例にも挙げた「北 bu/bo 対南 u/o」の対立特徴や北部の「ボリ(森)」(越中越後)『悉曇要決』等のような北方の有声音化現象から見ると、12世紀初めの『悉曇要決』に記載される「本朝北州其音濁龜矣(北州その声にごりてあ

らし)。南州其音柔也。」という特徴は、このような差異を指摘した古い記述と見なせる。

[南北型分布事象の類型]

南北型分布にはある程度の傾向が指摘できる。

地理的には、語彙は北日本に偏り、文法は南・北それぞれ個別に見られ、音韻は南北で対になった対応現象として現れるという傾向がある。

機能・意味的面の類型では、音韻における傾向としては、北方ではおおよそ「唇音化・円唇化、喉頭化、口蓋化」等に関わるという、古い日本語の特徴にも通じるような傾向が指摘できる。

語彙の意味的類型としては、①~④は寒冷・多積雪・長期的根雪地帯という気候特性に起因する現象として個々には説明されてきたが、⑥⑦や①のユキヤケには認知的な類型も認められる。語彙の場合、同じ語源の語が北日本において、「寒冷地特有の事物・現象への意味的有標化」というパターンが見られる(安部2004)。例えば次のような興味深い傾向を示している(／の後者が北での意味、カタカナは方言語形)。

〔温暖地 / 寒冷地特有の意味的有標化〕

- フキ(吹き) 〔風 / 吹雪〕、
 ○ユキヤケ(雪焼け) 〔日焼け / 凍傷(霜焼)〕、
 ○サワ(沢)・スガ・シガ(氷) 〔川・沼沢/氷・氷柱〕

(これらは「水・川」の意の同源)

文法では、事例がまだ少ないが、北方分布に「aru型動詞」の残存が顕著である。

[研究課題]

現在、音韻における傾向では、おおよそ「唇音化・円唇化、喉頭化、口蓋化」等に関わるという、古い日本語の特徴にも通じるような傾向が指摘できる。要因の1つとして、古い時期におけるアジア北方での呼気量の変化が検討されている(安部(2012.3))。

語彙では文化的特性の南北での相違(寒冷地特有の認知、および、荒町一新町、神様一天の神様などの南北の意識の特性)が指摘できるが、文法も含め未詳の部分がなおい。

東西対立やABA分布等の類型パターンに比べ研究が遅れているが、総合的解釈は、新たな事例の追加を含め、今後の研究が期待される。

[本章に関連する参考文献]

- 安部清哉(1999)「日本列島におけるもう一つの方言分布境界線“気候線”」『玉藻』35
 ○安部清哉(2004)「地名と日本語——河川地形名の言語空間」『国文学解釈と鑑賞』69-7
 ○安部清哉(2008)「アジアの中の日本語」『方言の形成(シリーズ方言学1)』岩波書店
 ○大橋勝男(2008)『日本海沿岸方言音声の研究』おうふう
 ○大橋勝男(2008)『太平洋沿岸方言音声の研究 上・下』おうふう刊
 ○加藤正信(1989)「現代日本語 方言」『言語学大辞典』「日本語」三省堂
 ○柴田 武(1962)「単語の全国分布」『人類科学』15新生社

5 アジアにおける南北方言分布境界線

日本語の方言分布に見出した「南北方言分布境界線」は、日本列島における南北での気候の相違を、主要な要因として形成されたものであった(安部1999)。東アジアの朝鮮半島、中国大陸にも、同様の気候の南北での相違が存在している。

日本列島と同様の気候の南北差は、中国大陸における「秦嶺・淮河線」と呼ばれる文化境界線にも投影しているが、中国方言もその位置で南北方言の境界線が認められる。同様に、朝鮮半島における朝鮮語にも同じ地理的位置に南北方言分布境界線が存在している。

つまり気候の界線に沿う位置に、朝鮮半島の朝鮮語でも、中国大陸の中国語にも、同様の南北方言分布境界線があることが確認できる(安部(2008.3))。◆図2は、その方言分布境界線を示したものである。これら東アジアにおける3つの言語の南北方言分布境界線をつなぐと、東西に横に一続きの方言境界線が横たわっていることを確認することができる(「モンsoon・アジア南北方言境界線」と仮称している)。

その意味でも、日本語におけるこの方言境界線の研究は、アジア言語史研究にとっても重要な意味をもつ(安部(2012.3)・安部(2012.3)も参照)。

6 インド・ヨーロッパ語における Centum-Satem 語派境界線

この南北方言分布境界線は、気候の影響によるものであるもので、欧州大陸におけるインド・ヨーロッパ語(IE語)にも認められる。

日本列島、朝鮮半島、中国大陸と同様に、気候の相違(最寒月期1月の平均気温0度等温線に代表させられる)が、その地域の言語の南北方言を2分しているなら、ヨーロッパ大陸においても、インド・ヨーロッパ言語の方言(語派)境界線と気候の境界線が、同じ位置に存在することになる。東アジアとまったく同じ現象が、ヨーロッパ大陸のインド・ヨーロッパ語の二大語派である Centum-Satem の境界線にも見られることを、

安部 (2013.3) において世界で初めて指摘した (◆図3)。

これらの一致は、今後、東アジアの言語・文化とヨーロッパ大陸のインド・ヨーロッパ語および欧州文化の比較言語・文化論的研究が、重要な研究課題であることを示している。

7 今後の研究課題として

日本語方言における「南北方言分布境界線」について、安部 (1999) の5本以降に見出したものを改めて列挙し、語彙・音韻・文法に整理し、その一部の特徴について概観した。

個別の方言現象には、すでに詳しく論じているものもある。例えば、⑮⑯⑰のように、音韻対応「k-p」として、中国語、朝鮮語に共通してみられる現象と解釈したものもある (安部 (2009.3))。語彙の語源 (北方分布スッカイ) を中国語と同源と解釈し、従来の解釈を否定したものもある (安部 (2011.3))。南北での相違が生じた要因を紀元前1万年に遡及するものと推定した現象もある (安部 (2012.3))。

さらに、この「南北方言分布境界線」と同じ現象は、ヨーロッパ大陸のインド・ヨーロッパ語のにも見られた (安部 (2013.3))。インド・ヨーロッパ語族の二分派、Centum-Satem の語派 (方言) 境界線も、同じ条件の気候の境界線と併行しているものであり、同質のものと考えられた。Centum-Satem における「k-kw (p)」という音韻対応は、東アジアの南北に見られた「k-p」対応 (安部 (2009.3)) と共通する現象と解釈できるものである。

本稿で示した日本語の南北方言分布境界線の研究は、東アジアの言語・文化とヨーロッパ大陸のインド・ヨーロッパ語および欧州文化の比較言語研究、比較文化論的研究のための基礎的一階梯である。

【参考文献】

- 安部清哉 (1989.3) 「古代語彙における併存する同 (類) 義語——目・マナコ型の東西分布——」『玉藻』24
- 安部清哉 (1997.3) 『『日本言語地図』偏在分布＝語形地図集』(『フェリス女学院大学文学部紀要』32)
- 安部清哉 (1997.8) 「もう一つの東西対立境界線“関東・越後線群”——『外日本＝中日本対立分布』＝地図集』(『玉藻』33、平成9・8)
- 安部清哉 (1998.3) 「日本列島上の歴史と文化におけるもう一つの東西対立境界線“関東・越後線群”——『広日本－中日本対立分布』＝地図集 (人類学・考古学・民俗学篇)』(『フェリス女学院大学

文学部紀要』33、平成10・3)

- 安部清哉 (1998.3) 「日本語におけるもう一つの東西対立境界線“関東・越後線群”——『広日本－中日本対立分布』＝地図集 (言語篇2) ——』『立正大学国語国文』36
- 安部清哉1 (1998.8) 「日本列島上の歴史と文化における分布境界線“関東・越後線群”——人類学・考古学・民俗学・気候学篇＝地図集II ——』(『玉藻』34 (フェリス女学院大学国文学会)、平成10・8)
- 安部清哉 (1999) 「日本列島におけるもう一つの方言分布境界線“気候線”』『玉藻』35
- 安部清哉 (2001.3) 「書評 迫野虔徳著『文献方言史研究』』『国語学』52-1
- 安部清哉 (2006.3) 「アジアと日本列島における言語・文化境界線“気候線”(摂氏0度線) ——言語地理学と文化地理学から——」『学習院大学文学部研究年報』52
- 安部清哉 (2006.10.14.) 「中国語・日本語・朝鮮語に共通する「東アジア南北方言と「気候境界線」(秦嶺山脈－淮河線)」『東アジア日本学国際シンポジウム予稿集』中国日語教学研究会・洛陽外国語学院日本語学研究センター共催 (洛陽外国語学院日本語学研究センター成立20周年記念、2007.10.13-15.) 要旨 pp.8-10、[汉语・日語・朝鮮語所共通的“东亚南北方言”和“气候境界线”(秦嶺山脈－淮河線)]、於・洛陽新友誼大酒店
- 安部清哉 (2007.3a) 『言語成層論モデルによる日本語とモンスーン・アジア地域の言語史に関する基礎的研究 (平成15-17年度科研費 (基盤研究 (C)) 成果報告書)』、pp.210.、私家版
- 安部清哉 (2007.3d) 「日本語方言における『呼気』の測定と地域差に関する記述的研究 (共同研究プロジェクト概要)、学習院大学人文科学研究所『学習院大学人文科学研究所報2006年度版』pp.27-36
- 安部清哉 (2007.10) 「中国語・日本語・朝鮮語の東アジア言語におけるある種の「音韻対応」(k-x-p)」王鉄橋・「女+兆」灯鎖主編『国際化視野中的日本学研究——紀念胡振平教授從教授45周年 (東亞日本学国際検討会論文集)』(洛陽・東アジア日本学国際シンポジウム論文集) pp.31-39. 天津・南開大学出版社
- 安部清哉 (2008.3) 「アジアの中の日本語」『方言の形成 (シリーズ方言学1)』pp.123-167, 岩波書店
- 安部清哉 (2009.3) 「『きつ (にはめなで)』(『伊勢物語』十四段) の日本語方言及びアジア言語の中の位置」『国文学言語と文芸』125, pp.37-58. おうふう社
- 安部清哉 (2011.3) 「日本語の味覚形容詞語彙の類型的構造および方言分布成立——「五味」とスイ・スッパイ・スッカイの語源 (中国語「酢」) の再検討——」『人文』9、学習院大学人文科学研究所、pp.7-34.
- 安部清哉 (2012.3) 「東アジア言語 (日本語・中国語・朝鮮語) の南北方言の音韻対応から推定された紀元前1万年前の『呼気量変化』(口腔鼻腔流出量比率変化) とその要因について」学習院大学人文科学研究所『人文』10, pp.7-39.
- 安部清哉 (2013.3) 「日本語およびアジア言語における「南北方言分布境界線」から見たインド・ヨーロッパ語族二分派 Centum-Satem の境界線」『東洋文化研究』15 (学習院大学東洋文化研究所)
- 大橋勝男 (2008) 『日本海沿岸方言音声の研究』おうふう
- 大橋勝男 (2008) 『太平洋沿岸方言音声の研究 上・下』おうふう刊

- 大林太良 (1986) 『東アジアの文化領域論』 植原和郎編 『日本人の起源』 小学館
 鏡味明克 (1984) 『地名学入門』 大修館
 鏡味明克 (1985) 『地名が語る日本語』 南雲堂
 加藤正信 (1989) 『現代日本語 方言』 『言語学大辞典』 「日本語」 三省堂
 迫野虔徳 (1998) 『文献方言史研究』 清文堂
 佐藤亮一 (1986) 『方言の語彙』 『講座方言学1 方言概説』 国書刊行会
 佐藤亮一監修 (1991) 『方言の読本』 小学館
 真田信治 (1979) 『標準語の地理的背景』 (『日本の方言地図』、中公新書)
 真田信治 (1981) 『日本海型方言分布パターン』 『言語生活』 360、筑摩書房。図はいま、真田 (1989) 『日本語のバリエーション』、アルク社による。
 柴田 武 (1962) 『単語の全国分布』 『人類科学』 15 新生社
 橋本萬太郎 (1981) 『現代博言学』 (大修館書店、初出は図 B1978・図 A1980)
 蜂矢真邪 (1998) 『国語重複語の語構成論的研究』
 福田良輔 (1972) 『東国方言の国語史的意義』 『万葉集 [II] —— 言語と歌論 —— (大東急記念文庫 文化講座講演録』 大東急記念文庫、「複語尾る——カハル (交フ)、サハル (サフ)、カカル (懸ル)、ほか。』

〔記念論集に寄せて〕

宮坂覺先生とは、フェリス女学院大学の専任として奉職させていただいた15年間、日本文学科 (国文学科) でご一緒させていただいた。共にまだ若かりし時期はお酒の席もよくご一緒し、「芥川龍之介が自殺した年齢を越えてしまった」と嘆いてもらっちゃったのが、昨日の事のように思い出されてくる。「小さいけどボートを買ったよ!」と少年のように目を輝かせていたことを今でも忘れぬ。教育にも研究にも情熱の人で、フェリス女学院大学の学長にふさわしい方と当時から感じていた。先生の今後ますますのご研究のご発展とご健勝を心からお祈りいたしております。(安部 拝、2013年1月)

(元本学教授、現在 学習院大学文学部教授)

玉 藻 第四十七号

二〇一三 (平成二五) 年二月 十日印刷
 二〇一三 (平成二五) 年二月二十日発行

編集兼 フェリス女学院大学国文学会

発行人 代表者 佐藤 裕子

印刷所 メディア・パック

〒178-0061 東京都練馬区大泉学園町

六一三一二〇

電話 (〇三) 五九四七一九一三五

発行所 フェリス女学院大学国文学会

〒245-8650 横浜市区緑園

四一五十三